新刊紹介

教化研究所編「清澤滿之の研究」

今日、清澤滿之の存在は少くとも二重の意味に於て重要である。一は日本佛教史、思想史上に於ける彼の位置づけについてである。明治初年の廢佛毀釋は、ある意味で過去の日本佛教の總決算としての性質を持つが、更に新しく導入されてくる西洋近代思想を迎え、これら狂瀾怒濤に如何に對決するかは、まさに日本近代佛教の最大課題であつた。それに對する各宗各樣の多くの應答をわれわれは指摘し得るが、殆んどの場合、嚴密な意味で、その對決を克服したとは云い難い。その中にあつて、清澤滿之の首唱した精神主義は、彼自らの幅の廣い西洋哲學への理解と、激しい求道的實踐によつて、よく佛教の近代的再確立を成し遂げた。清澤滿之の存在が、特に戰後の佛教史、思想史學界に於て頓に注目されつつある所以である。

清澤の存在は、このような云わば過去的な意味に於てよりも、現在的及び未來的な意味でより重要である。云うまでもなくそれは我が宗門的な意味に於てである。清澤の近代眞宗教學確立者としての宗學史上の評價については、今更喋々するを要しないが、そのような彼が宗門の師表と仰がれ、指向さるべき方向として求められている。嘗ての明治四十三年に於ける宗祖六百五十回忌の頃に、清澤への追慕が澎湃として起つたが、來るべき七百回忌御遠忌を控え、今や清澤滿之は親鸞教學の近代的再現者として、宗門における現在的未來的な意味で追求されている。

本書の刊行に先だつて、清澤滿之全集（同刊行會刊、全八卷）の刊行をみたが、それは右のような二重の意味の清澤への評價の上に編纂され、嚴密な年代考證を基礎とした歷史的傳記的集成と、清澤の宗門的傳統に於ける位置づけの意圖を以て編まれたものであつた。本書はこの全集を基礎史料とし、右の二重の清澤への要請を滿たすべく、東本願寺教化研究所の共同課題として、歲餘の總合研究を經て、編述されたものである。從つて本書が、從來の清澤門下生の人々の記述になる追懷的、傳記的な多くの著作に比して、文字通り清澤滿之の「研究」として、あくまで客觀的、研究的な學究的舒述としての嚴密さを持つていることに大きな意味を認めねばならないし、同時に、清澤滿之の「來るべき世界的統一的文化の源泉として大谷派本願寺の存在意義を認識して」(p.142) いた事實への再認識と云う現在的未來的な意義が全舒述者に共通して希求されていることに、本書の大きな特色を認めねばならない。

本書の內容は「序」（谷內正順）、「清澤滿之の信仰」（佐々木蓮麿）、「清澤滿之の精神主義」（松原祐善）、「清澤滿之の俗諦的意義」（西村見曉）、「眞宗大學」（廣瀨杲）、「清澤滿之の哲學的基礎」（西山邦彥）、「浩々洞」（宮城顗）、「教團再興」（寺川俊昭）、「あとがき」（竹田淳照）、及び年表、索引より成つている。今、管見の及ぶ限りに於て、各論者所說の一端を概觀して紹介に代えれば次の如くである。

先づ佐々木氏は、純宗教的な觀點から清澤を親鸞を繼ぐ人として把え、彼の信仰を人間の自主性の自覺としての立場に

於て見出し、その絶對の信境、救濟の極地を清澤の自己體驗の告白としての清新さに於て把握し、彼の到達した無責任主義こそ絶對他力の立場からする道德の再發見に外ならないことを、九章に亙つて論じた。次に松原氏は、宗教的觀點に立ちつつ巧みに清澤をその環境の中に於て把え、彼の浩々洞生活と雜誌〝精神界〟發刊の晩年に理想的僧伽の具現を見出し、清澤が宗門のためにのみ自己の生涯を燃燒し盡した理由は、「この宗門の興廢消長にはまづ自己の安心の確立と、やがては人類の運命を重く荷負されてあること」(p.54)を自覺した彼の全身的な宗門愛によることを論じ、更に精神主義の實行主義的、內觀主義的性格とその完全なる自由の立場、他力的立場について述べ、それは佛弟子の自覺に極まることを、四章に分つて詳論した。次の西村氏の論攷は三章に分れ、生涯の俗諦門との葛藤を通じて始めて清澤の信念が光揮を發したことを論證することに努め、哲學的宗教的觀點に立ちつつ、清澤の獲信の發端からその外俗內僧的生活が自己のオノヅカラ的=自然的(p. 185)把握に究まる過程を、嚴密な歷史的記述により編年的方法を用い、清澤の經驗した社會的、國家的、教團的、家庭的、身體的等々との諸葛藤を通じて論じている。氏のこのような舒述の方法論は、氏の嘗ての名著「清澤滿之先生」に具現されているが、それは先に擧げた清澤滿之全集の編纂を通じて示された、氏の清澤への求道的直參と、客觀的歷史的な鋭い洞察力によるものであつた。次に廣瀨氏は、四章に分ち、我が大谷大學の前身であり、清澤滿之を初代學監とする眞宗大學が、清澤の學道精神によつてその根本精神を構成することを明らかにし、その具體的な大學の經營事情、大學の內容、學生問題等に說き及び、最後に清澤の「行學に統攝せられる解學としての佛教學」(p.252)に近代佛教學の道標を求めて結章としている。次の西山氏の論攷は、哲學史的な立場に立つて、先づ清澤の近代日本精神史上に於ける位置づけを試み、福澤諭吉をピークとした明治十年代の近代合理的資本主義精神と、その後の帝國主義的發展と佛教の家族國家觀への妥協の中にあつて、清澤がよく宗教的例外者としてその主體性を確立したことを述べ、更に精神主義首唱前の清澤の宗教哲學の形成と構造について詳論し、問題を二章に大別して論じている。次に宮城氏は、明治三十三年以後の清澤を中心とした學舍たる浩々洞の成立事情と、清澤歿後の洞人の恩寵主義的傾向、及びその破綻としての洞の衰滅について述べ、更に明治佛教界の諸種の復興運動中に於ける洞の位置及び人間的、佛者的な實驗の場としての浩々洞の存在意義について、三章に亙つて論じている。最後に寺川氏は、四章に分つて、清澤の教團再興の具體相を論じ、彼がそれを天職としたのは、一に佛法の現成、歷史としての教團と云う「この眞實の傳統を身を以て發見すること……願わくばこの傳統の莊嚴となること」(p.454)の一事に極まることを論じた。

以上が本書に於ける諸氏の論攷の管見し得た論旨である。右によつて、清澤に關する諸問題の論ずべきものは概ね論じ盡されていると云つてよい。尤も、歷史家流の私見をさしはさめば、清澤を親鸞教學の繼承者としてみる場合、親鸞から清澤へ流れる教團的信仰的傳統を再評價

し、おさえ取る必要があると思うし、清澤の時代的背景についても今少し幅廣く、系統的な舒述があれば、より判然としたかとも思う。しかし乍ら本書は、このような望蜀的要求に拘ることなく、嚴密な研究的論著として劃期的な意味を持つものであり、より以上に啓蒙的な意味に於て重要性を持つことを強調したい。卽ち、先に云つた如く、本書の希求する現在的、未來的意味に於てである。清澤が身を以て歩んだ苦惱の道と、宗教的な自主性の樹立、その眞宗的傳統を背負つての主體的信の確立、その場としての宗門への無限の愛情等々、われわれに投げかけ、われわれの内面の琴線をゆり動かす問題を、本書は多く語りかけている。そして、特に本書に宗門的な願いのこめられていることを強調して、敢て本書を推す次第である。（昭和三二・一一、東本願寺内教化研究所刊、¥・五〇〇）

（柏原）

大乘佛教瑜伽行の研究

野澤靜證著

本書は解深密經の「分別瑜伽品」（チベット譯の聖者慈氏章第八）の研究を主體とし、瑜伽行派における瑜伽行の内容を考察したものである。解深密經にたいする注目すべき研究としては、エチエンヌ・ラモート氏のフランス譯、西尾京雄先生による「無著の解深密經疏の和譯と研究」（佛地經論之研究大谷學報第二十二卷1、3）、稻葉正就氏による「圓測解深密經疏の散逸部分の研究」をわずかにあげうるのみであるので、この著者の研究は、甚だ貴重である。解深密經の研究が、他の瑜伽唯識の論書の研究に比してわずかであるのは、現代の佛教學が經典の研究よりも論書の研究に主きをおく傾向のあらわれかもしれない。しかし、勿論、これは良い傾向でない。周知のように、解深密經は瑜伽行派の教義の構成に重大な關係をもち、瑜伽行派において最も重要視される經典である。瑜伽行派の教義は解深密經を中心に開展したといつてもよい。したがつて、瑜伽行派の教義の源流をたずね、その思想史的性格をさぐるには、何としても解深密經が研究せられ、その内容が明らかにされねばならない。ことに、本書のように瑜伽行派における瑜伽行の内容をさぐるには、解深密經の「分別瑜伽品」の研究は、すこぶる重大な意義をもつている。「分別瑜伽品」は、唯識の教證として常に引用される〈識所變唯識所現〉という有名な言葉の出ずる一章であるが、唯識の理論というよりは唯識の實踐的な觀法である瑜伽行の詳細な内容を說き、唯識說を瑜伽行において語るところに特色をもつた重要な一章である。我々は、このような重要な解深密經の一章の研究が推進されたことに、まず衷心より喜びをあらわしたい。

「分別瑜伽品」にたいする著者の研究は、チベット譯「聖者慈氏章」（分別瑜伽品）の經文と、これにたいする覺通(Byaṅ-chub rdsu-ḥphrul)と智藏(Jñāna-garbha)との註釋を和譯して、これに註記を附するという、原典解明の方法をとつている。このような和譯と註記とによる原典解明は、「分別瑜伽品」にたいする最も客觀的な基礎的研究であろう。梵語原典が發見されない解深密經にとつては、梵語原典の直譯態としてのチベット